

く所に従つて、補導宜しきを得たるの致す所と可申候。

△我輩の見る所を以てすれば、玉堂は眞に一種の教育家にて候。

此の教育家を近きに捨て、遠きに栖鳳を擧げんとしたる、思ふに其の名に酔へるの致す所なるべきも、彼も一時の事也。須らく早きに順序を踏んで、川合玉堂を玉章後任として推薦せんこと、切望の至りに不堪候。知らず正木校長の心事や如何に。

(明治四十五年七月十五日『読売新聞』)

玉堂の採用に伴つて大正四年九月に日本画科の教授法およびその他の科の日本画担任が大幅に改められた(前頁「東京美術学校近事」参照)。

④ 元教授荒木寛畝の死去

荒木寛畝の死去を『東京美術学校校友会月報』第十四卷第三号は次のように報じた。

荒木寛畝畫伯の訃

帝室技藝員として南北合派の泰斗として我繪畫界に聲譽を馳せたる正五位勲六等荒木寛畝翁は、糖尿病を患ひて、去る四月下旬大學病院に入りしが、其後又癱を發し、近藤外科にて切開手術を受けしが経過は良好なりしも、高齢の故を以て衰弱甚だしく、遂に六月三日午後一時を以て卒去せり享年八十有五、洵に痛惜に堪へざるなり。

葬儀は同月六日谷中齋場に於て佛式にて営まれたり、柩の齋場に

安置せらるゝや、同家の菩提寺牛込區辨天町淨輪寺住職は、數名の式衆を隨へて儀を始め、次で帝室技藝員總代高村光雲氏、東京美術學校長正木直彦氏、美術協會會頭土方伯(代)友人總代九鬼男(代)日本畫會總代畑仙齡氏、門人總代池上秀畝氏等、順次に弔詞を朗讀し式を終りたるが、當日の會葬者は其數七百餘名に及びたり。

翁は天保二年六月十六日江戸芝赤羽橋の邸に生る、父を文周といひ、九歳の時、狩野派の荒木寛快の門に入りしが、二十二歳の時其嗣子となり、爾來諸家の畫法を參酌して南北の法を折衷して合派を成す、曾て山内容堂公の知遇を得て、安政六年土佐藩の繪所となり、維新後は獨立して畫塾を開き、明治五年奥國大博覽會に菊花圖を出品して褒狀賞金を得、其の後今日に至るまで、内外博覽會展覽會等に出品して金銀賞牌を受くる事限りなし、十五年には宮内省御用畫を勤め、二十年 皇居御造營の際には御杉戸を畫き、廿三年の博覽會の折 陛下行幸に際して御前畫の榮譽を荷へり。廿六年四月五日女子高等師範學校より繪畫授業を囑託せられ、三十一年四月廿八日東京美術學校教授に任ぜられ、高等官六等に敘す。同年六月十日正七位に敘す。卅三年七月六日東京工業學校より繪畫授業を囑託せらる。三十四年七月廿一日帝室技藝員を命ぜられ、また内國博覽會、臨時博覽會、東京博覽會、若くは文展其他公私の審査員として斯道に盡す所多く、本校に在りては孜孜として後進の教養に努め、果進して四十年三月十一日從五位に至り、同十二月二十七日勲六等に敘し瑞寶章を授けらる。同四十年八月廿九日依願本官を免ぜられ、特旨を以て正五位に敘せ

らる。翁は平素端嚴、溫讓、然も稜々たる俠骨を有せり。翁又川上冬崖に就きて洋畫を學び、曾て英照皇太后の御肖像を描き奉りし事あり。花鳥山水何れも其技精妙に達せるが、殊に孔雀は得意とせし所なり。嗣子十畝氏能く翁の衣鉢を傳へて令名あり。門下又池上秀畝、廣瀬東畝等、幾多の逸足を輩出せり。

⑤ 襟章制定

これについては「至 明治四十四年一月 教務内規、諸規定書類教務掛」に次のように記録されている。

生徒制服へ襟章附著ノ件揭示案何

生徒一般

自今本校各分科生徒ノ識別ヲ容易ナラシムル爲生徒制服上衣ノ左

記

(採用シタルモノ)



各科襟章

(揭示案添付文書より。)

襟端ニ別記文字ノ襟章ヲ附著スヘシ

但シ本襟章ノ販賣ハ本校出入商人静一堂ニ之ヲ許可セリ

大正四年九月 日 本校

右文書欄外に「九月十一日学年始ヨリ実施」という記入と羽田

(禎之進)の捺印がある。

⑥ 矢代幸雄の起用

岩村透の辞職(正式な辞職は大正五年四月七日休職満期の時点である。)に伴い、正木直彦校長は大正四年九月十日付で矢代幸雄を囑託として起用した。矢代は明治二十三年生まれで大正四年七月に東京帝国大学文科大英文学科を卒業し、大学院に入学したばかりの青年であった。正木は『回顧七十年』(昭和十二年。学校美術協会出版部)の中で矢代の起用について、

大正の初め、美術學校で英語の教師を求めて居つた時、一高校長の瀬戸虎記君から、

『丁度、今年帝大英文科を出たので、矢代幸雄といふのがある。これは銀時計組で、かなりの俊才であるから、必ず役に立つだろうと思ふ。一つ使つて見て貰ひたい。』

と云つて來た。本人に會つて話して見ると、

『私は大學へ行つて居り乍ら、太平洋畫會へ行つて繪を習つたり、又彫刻もやつたりしてゐました。専門は英文學ですが、行く／＼は美術史家と云ふものになりたいて考へです。だから、美術學校へ英語で使つて貰へたら便宜が多くて結構だと思ひます。』